

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

#### ③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

##### 《人社系》

##### ●関西大学総合情報学研究科社会情報学専攻

##### 「参加連携型の大学院教育による社会創造」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本教育プログラムは、インターンシップやフィールドワークを取り入れてきた。その評価についてeポートフォリオやルーブリックを用いたが、学生の学びをすべて数値化して示す点に難しさを感じた。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

インターンシップやフィールドワークを経験した学生の振り返りは質的な評価として表わされる。本教育プログラムに関わる教員は、学生の変化を感じることはできるが、それを学外の教員に伝え、教育プログラムの具体的なあるいは数値的な効果を示していくことが困難であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

問題の解決のため、ルーブリックによる学生の振り返りを数値化して示すことや、学生の学修成果を「事例」として示すことで、本教育プログラムの評価を示すことができた。しかし、数値化の限界を評価者は十分に認識する必要がある。教育成果は簡単に数値化はできないだけでなく、安易に数値化することで問題を残す可能性が高い。評価として質的な記述をもっと積極的に取り入れるべきである。